「神に求めよ」　　イザヤ７：３～１４

導入

世の中には、時代を象徴する人物というのが登場することがあります。スポーツであれば、その時代を象徴するようなスター選手を挙げることができるでしょう。アメリカなら、大統領は、まさにその時代を象徴するような存在です。ときの大統領を抜きにして歴史を語ることはできません。そのように世の中に大きな影響力を持っている象徴的な人物は、その去り際においても、また、世の中に大きなインパクトを与えるものです。スター選手が引退すると、一つの時代が終わったように思います。大統領の死は、アメリカの国民に、彼が大統領として活躍してい時代を思い起こさせ、それがもう戻ってはこない過去になったことを印象づけます。講壇から政治について語るつもりはありませんが、今の日本の報道をみると、安倍元首相の存在というのは、大きな影響力を持っていたんだなぁと実感いたします。歴史的評価は、これからの人に任せるとして、今回の事件は、これから日本はどんな時代になっていくんだろうかと、そう思わせる事件でした。

時代背景１（繁栄から不安の時代へ）

今日は、イザヤ書からみことばを取りつぎたいと思っています。イザヤは、ユダ王国で活躍した預言者ですが、大きな時代の変化の中に生きた預言者でもありました。イザヤ書の１：１を見ますと、「ユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ」という４人の王の治世にわたって、神のことばを預言したことが分かります。この４人の王の時代、ユダの国は「繁栄」から「不安」と進んでいった時代です。

最初のウジヤ王は、軍事的にも優れた王であり、国に平和をもたらしました。52 年間という在位期間は、歴代 2 番目の長さです。ウジヤは、農業や商業活動の発展にも力を入れたため、国は豊かになり、人々のくらしも良くなっていました。ウジヤ王の時代は、そのような繁栄の時代でした。ウジヤ王は、晩年に高ぶりの罪を犯し、ツァラアトという病に侵されることとなりましたが、それでも聖書は、主の目にかなうことを行った良い王として評価しています。

このウジヤ王が亡くなる数年前ごろから、ユダの国をとりまく状況が変化しはじめます。アッシリアという新たな国が台頭し、力をつけ、周囲の国々を征服していったのです。この頃はまだユダから遠くの国の出来事ではありましたが、周囲の国々を巻き込む戦争のうわさが徐々に迫ってきていました。そんな風に人々が漠然とした不安を感じ始めたころに、ユダの「強さと繁栄」を象徴するかのような強い王、ウジヤは死にました。ユダの国の人々は大きく動揺したのです。

イザヤ書６：１節には、「ウジヤ王が死んだ年に、私は、高く上げられた御座に着いておられる主を見た。」そして、イザヤは８節「だれを、わたしは遣わそう。だれが、われわれのために行くだろうか。」という主の声に召されて、イザヤが本格的な預言者としての務めを開始しました。「繁栄」から「不安」へと進んでいこうとしている時代、そしてそれを象徴するかのようなウジヤ王の死、人々が大きく動揺したそのときに、主なる神様は、預言者を遣わしてみことばをお語りになりました。もしも今、私たちが、この時代に何か不安を覚えるのであれば、私たちは今、主がお語りになられる言葉を聞くべきとき立たされているのかもしれません。

時代背景２（さらなる不安の時代）

さて、ウジヤ王の死後、約 10 年くらいの間は、その子ヨタムが王としてユダの国を治めました。歴代誌第二２７：２には、「彼は、すべて父ウジヤが行ったとおりに、主の目にかなうことを行った。ただし、主の神殿に入ることはしなかった。民は依然として滅びに向かっていた。」とあります。ヨタムも良き王ではありましたが、時代としては「民は依然として滅びに向かって」すすんでいました。アッシリアは力

をつけ、戦争と侵略とのうわさは、ますます身近になっていきました。

そしていよいよ、ヨタムの次の王アハズの時代になったときに、ユダの国も戦いに巻き込まれることとなりました。しかし、ユダの国、エルサレムに攻めてきたのは、アッシリアではありませんでした。7：1をお読みします。「ウジヤの子ヨタムの子、ユダの王アハズの時代、アラムの王レツィンと、イスラエルの王レマルヤの子ペカが、戦いのためにエルサレムに上って来たが、これを攻めきれなかった時のことである。」アラムとイスラエルはユダの北にある国です。アッシリアは更にその北にあります。この 2 つの国にとって、アッシリアの脅威は非常に差し迫ったものであり、なんとか力を合わせて対抗しようとしていました。アラムとイスラエルの王は、ユダも仲間に加わるようにと迫ったのですが、ユダがそれを渋ったために攻めてきたのでした。実際に戦争が起こったとき、ユダのアハズ王は、すっかり心が萎えてしまいました。7：2 にはこのように記されています。「ダビデの家に、「アラムがエフライムと組んだ」という知らせがもたらされた。王の心も民の心も、林の木々が揺らぐように揺らいだ。」そのようなときに、語られた言葉が今日のみことばになります。今朝はこの御言葉にある 4 つのメッセージに心を留めたいと思います。

メッセージ①　恐れてはならない。

主がお語りになられた最初のメッセージは、「恐れてはならない」です。3 節。「そのとき、主はイザヤに言われた。『あなたと、あなたの子シェアル・ヤシュブは、上の池の水道の端、布さらしの野への大路に出向いて言って、アハズに会い、4　彼に言え。『気を確かに持ち、落ち着いていなさい。恐れてはならない。あなたは、これら二つの煙る木切れの燃えさし、アラムのレツィンとレマルヤの子の燃える怒りに、心を弱らせてはならない。』」

エルサレムは城壁に囲まれた天然の要塞です。守りは強固でしたが、立てこもって戦うためには、一つ重大な問題がありました。水の確保という問題です。その弱点を補うために、後々地下に水路が造られることになりますが、まだそれができていないこの時代、水源の確保は死活問題でした。それで、アハズは水源のある、上(かみ)の池の水道へと出向いていきました。心が揺らいでいた、アハズは不安で仕方がなかったのですね。

そんなアハズに、主は「気を確かに持ち、落ち着いていなさい。恐れてはならない」と言われます。あなたが恐れているアラムの王と、イスラエルの王。彼らの燃える怒りは、あなたにとって恐ろしく見えるかもしれないが、それは「木切れの燃えさし」でしかない、と主は言われます。強大な軍事力も、人を脅えさせるような力も、主の前では、ただくすぶっているだけの「燃えさし」であり、何の力もありません。そんなもののために、「心を弱らせてはならない」と主は言われます。

私たちが不安をいだいているとき、その対象を過大評価していることはないでしょうか。それは、真に偉大なお方であり、唯一恐るべき御方をさしおいてもなお、恐ろしいものでしょうか。心を弱らせてはいけません。そして、弱らせる必要はないのです。気を確かに持ち、落ち着きましょう。私たちが信じている神様がどんな御方であるのかを思い出すのです。

主は、われらの避け所であり、また力です。苦しむとき、そこにある助け（詩篇 46 篇）です。主は、巌(いわお)、わが砦、わが救い主。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。(詩篇 18 篇)。身を避けるものを救う方。瞳のように私を守り、御翼の陰にかくまわれるお方（詩篇 17 篇）です。

メッセージ②　信じなければ堅く立つことはできない

もし、信じないならば、私たちは堅く立つことはできない。これが 2 つ目のメッセージです。世の困難は、現実の力をもって私たちに迫ってきます。アハズは、何も理由なく恐れたのではなく、すぐ目の前に

アラムとイスラエルの軍隊という脅威がありました。6 節にしるされている「われわれは、ユダに上ってこれを脅かし、これに攻め入ってわがものとし、タベアルの子をその王にしよう」、これが二人の王の企みです。それに対して、神様は、7 節「神である主はこう言われる。それは起こらない。それはあり得ない。」と、力強くお語りになりました。そして 8 節の後半で主は、「エフライムは六十五年のうちに、打ちのめされて、一つの民ではなくなる。」と、エフライム＝イスラエル王国の滅亡までもお語りになられました、そして、この言葉は、実際に現実のものとなりました。

この預言の前後には、特徴的なフレーズがあります。「アラムのかしらはダマスコ、そのダマスコのかしらがレツィンだから。」、「エフライムのかしらはサマリア、そのサマリアのかしらがレマルヤの子だから。」。アラムの国の首都ダマスコとその王レツィン、エフライムすなわちイスラエル王国の首都サマリアとその王レマルヤの子ペカ。この二人の王が、今のユダの国、エルサレムの危機をつくり、その主導権を握っている様に見えます。しかし、このふたりの王は、先ほど出てきましたように「木切れの燃えさし」でしかないのだから、そんな力はありません。

ここでは、敢えて語られていないもう一つの国、もう一つの都、もう一つの王に、神様の目は向けられています。「ユダのかしらはエルサレム、そのエルサレムのかしらはダビデの家に連なるアハズよ、あなたではないのか。」エルサレムは、神がその名を永遠に置く（歴代誌第二６：６、７：１６）と言われた、永遠の神の都です。その王は今はアハズですが、さらにいうならば、その真の王は、ダビデの子であるメシアです。それは、後の世において王となられるイエス・キリストであり、この御子キリストを遣わされた父なる神様です。目の前の現実がいかなるものであったとしても、その場を統べ治めておられるのは、主なる神に他なりません。

信仰とは、天と地を造られ、すべてを統べ治めておられるまことの神を信じ、その言葉に堅く立つことです。わたしたちが立つべきは、まことの王であられる神の側であり、その神が語られた御言葉です。この御方と御言葉とに立つことがなければ、私たちは、遅かれ早かれ、この世にあって何らかの「恐れ」にのみ込まれ、立ち続けることはできなくなるでしょう。私たちは、信じなければ、この世においても、堅く立つことはできないのです。

メッセージ③　しるしを求めよ

3 つ目のメッセージは、「しるしを求めよ」です。10 節、11 節。「主はさらにアハズに告げられた。『あなたの神、主に、しるしを求めよ。よみの深みにでも、天の高みにでも。』」それに対するアハズの答えは「私は求めません。主を試みません。」というものでした。これは一見、宗教的には正しく、そして敬虔に見える回答です。申命記には「(あなたがたがマサで行ったように、) あなたがたの神である主を試みてはならない。」(申命記６：１６）という御言葉があるからです。それに則った教科書的な答えをアハズはしたのでした。

しかし、今ここでは、神様が「しるしを求めよ」と言われているのです。それを退けて「私は求めません」というのは、アハズの不信仰と頑なさの現われです。主は「求めよ」と言われたのであって、「試みよ」と言われたわけではありません。

「神様に求めること」と「神を試みること」、この違いは何でしょう。神はうわべではなく、心を見られるお方です。最も大きな違いは「心の在り方」の違いでしょう。たとえば、私たちの祈りについて考えてみましょう。真剣に神様に何かを願い求めるというのは、神様の前に砕かれることを伴うものです。困難の中で、真心から主に向かって叫び求め祈るとき、私たちは、神の御前でへりくだざるをえません。聖霊の導きのうちに、時には隠れた罪や、見て見ぬ振りをしてきた問題が示されたりもします。そんな葛藤が続くことがあります。しかし、その度毎に、それでもなお私たちを愛し、キリストにあって許しを与え

ようとしてくださる神に、私たちは出会い、そうやって信仰が増し加えられていきます。神様に求めるというのは、何を求めるにせよ、最終的には神様御自身を求めることへと繋がっていて、私たちと神様との関係性の問題に行きつきます。

それに対して、自分の規準によって神様の業の良し悪しを判断しようとし、自分が変えられることを全く望まずに、何かを求めるなら、私たちは神を試みてしまっているといえます。自分のものさしに堅く立って、そこから動こうとしないという心のあり方は、神様との関係性を求めることがなく、つきつめるならば神様を強いて何かをさせたり、神様の方に変わることを求めるものです。すでに偶像礼拝(Ⅱ歴代誌 28:1-6)に陥っていたアハズは、主の前に身を低くし、悔い改めることを拒んだのでした。神との関係を正そうとせず、自分が変わることを拒むアハズの姿勢こそ、むしろ「神を試みる」ものであるといえます。

メッセージ④　主は自らしるしを与える　「インマヌエル」

最後の 4 つ目のメッセージは、「主は自らしるしを与える」です。アハズの返答を聞いて、イザヤは言います。13 節「さあ、聞け、ダビデの家よ。あなたがたは人々を煩わすことで足りず、私の神までも煩わすのか。」私たち人間に、いつも与えよう、恵もう、愛そうとしてくださっている神様にとって、それを信じず、受取ろうとしない人間の不信仰と頑なな心ほど、煩わしいものはありません。人間が神を煩わすことなどできるのだろうかと思うかもしれませんが、神様の愛を受け取らず、それを裏切ることによって、人は神を煩わしているのです。そんな私たち人間を、神様は永遠に退けて、捨ててしまっても良かったのです。アハズの場合、彼がしるしを求めることを拒否したところで話が終わってしまったとしても当然なことでした。

ところが、神様はそうはなさいませんでした。人間が頑なであったにもかかわらず、いや、頑なであったからこそ、神様は自ら、ご自身の意志において一つのしるしを与えることを決められました。アハズの頑なさに対して、「それゆえ」とイザヤは続けています。14 節「それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」神様がお与えになるしるしとは、処女が身ごもるというという不思議な出来事であり、そして「インマヌエル」と呼ばれる一人の男の子でした。みなさん、ご存じの通り、「インマヌエル」とは「神は我らと共におられる」という意味です。この乙女から生まれるお方こそ、神様が私たち人間に与えてくださるしるしです。このお方によって、私たち人間は、「神がわれらと共にいてくださる」ということを知るようになるのです。

新約聖書を読んでいる私たちは、この神様の約束が、イエス・キリストによって、既に実現していることを知っています。私たちがまだ罪人であったときに、私達のために死んで下さったこのお方によって、私たちは神の愛を知りました。「神が私たちと共にいてくださる」お方であることを知りました。神は罪ある人間を赦そう、愛そうとしておられるのだと知ることができました。そして、キリストの十字架の贖いのゆえに、私たちは罪ゆるされて、神の子とされて、神様の御前に立つことができるようになりました。人間の頑なさの故にこそ、神様が一方的に与えてくださったしるしがイエス・キリストでであり、私たちに救い主であるキリストが与えられたのは、神様の一方的な憐れみであり、恵みの賜物なのです。

神に求めよ

イエス様は、「７求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。８だれでも、求める者は受け、探す者は見出し、たたく者には開かれます。」（マタイ７：７―８）と言われました。神の子とされた私たちキリスト者は、今、神様に何を求めているでしょうか。真剣に祈り求めるとき、神様との関係が問われると申し上げました。神様との関係とい

うことで言うなら、私たちクリスチャンは、イエス・キリストにあって既に神の子とされています。父なる神様と子とされたという意味では関係性はすでにキリストにあって決定されています。だから、私たちは、キリストの名前によって大胆に祈ることができますし、神様はそれを求めておられます。

しかし、私たちがどんな子どもであるのかはまた別です。無垢な心で神を求める子もいれば、反抗期を迎えている子供もいるかもしれません。救われた罪人である私たちは、神様との関係において前進し、交わりを深めていく必要があります。そして、私たちは神様に求めることにおいて、神様との交わりを深めていくのです。神様の前に柔らかい心を持ち、神様によって自分自身が変えられていく心を持っているのなら、しるしを求めることも悪くはないでしょう。御霊の導きによって、それは主を求めることへと導かれます。そうして、主との関係において、私たちは神の子としてさらに成長させられていきます。

主なる神様も、「12 あなたがたがわたしに呼びかけ、来て、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに耳を傾ける。13 あなたがたがわたしを捜し求めるとき、心を尽くしてわたしを求めるなら、わたしを見つける。14 わたしはあなたがたに見出される。」（エレミヤ 29：12-14）と約束してくださっています。

不安の時代にあって、アハブのように慌てて行動するのではなく、何をするにも神に求めることから、祈ることから始めたいと思わされます。神の国の住人とされ、天に国籍をもっている私たちキリスト者は、小さく祈るのではなく、大胆に祈り求めることが期待されています。

お祈りいたしましょう。